

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第3号

特集： 中濃の戦国史

・「東美濃攻略から見る織田信長」	石原 伶緒		2
・「織田信長、語られない天下布武の第一歩」	山内康誠		3
・「関市に残る明智伝説」	山内康誠 藤井大輝 小山政亮 早川千景 (関市役所)		5
・研究経緯（関高SGH情報より）			9
<特別寄稿>			
・「織田信長の東美濃攻略と地域の歴史資源の活用を考える ～岐阜県富加町～」	島田崇正（富加町教育委員会）		12
・「小野山城の保全・活用 ～岐阜県関市富野地区～」	川合治義 中嶋亘（富野地域委員会）		20
・「史実と小説のあいだ」	中島真也（関市役所）		25
・後記			26

2020年6月11日

東美濃攻略から見る織田信長

石原伶緒

(ニュージーランド留学中)

かつての東美濃、現在の岐阜県美濃加茂市、富加町がある一帯。今から約 450 年前の戦国時代、この地で激しい戦いが繰り広げられた。必死に守る斎藤勢を攻め立て、采配を振っている武将がいる。織田信長だ。

尾張の一地方領主だった織田信秀の子として生まれた信長。家督を継いだのち、戦国武将としての頭角を現していく。圧倒的寡勢だったにもかかわらず今川義元の大軍を破った桶狭間の戦いを皮切りに、斎藤、朝倉、浅井、武田といった有力武将を次々に撃破した。向かうところ敵なしと見えた信長だったが、本能寺の変で配下の明智光秀に討たれるという、壮絶な最期を迎える。

信長はその類まれなる強さで有名だ。しかし、信長はただ単に強いだけの武将ではない。楽市楽座、一向一揆の弾圧、南蛮貿易など、前例にないこと、珍しいことを次々に実行している。時代の革新者とも称されるこの武将は、一体どんな人物だったのだろうか。信長の東美濃攻略から、その人物像を考える。

尾張を統一した信長は、次の目標を美濃国に定めた。父信秀が何度も軍を送り、そのたびに撃退された国である。美濃国を治める斎藤氏の手強さを知っていた信長は、信秀とは違った方法で侵攻を試みた。尾張から近く、敵の本拠地である稲葉山城ではなく、東美濃から攻略していったのだ。遠回りをしてまで、なぜこの地域にこだわったのか。疑問に思った私は、地元の方の案内とともに、富加町を訪ねた。富加町には、加治田城跡や堂洞城跡といった、信長の東美濃攻略の舞台となった城跡がある。城跡とその周辺地域を歩いてみると、なるほど信長がこの地域にこだわった理由がよくわかる。飛驒と美濃国をつなぐ街道が走り、川が流れるこの地域は、交通、商業の要所だったのだ。近くには、日本刀の一大生産地である関もある。信長は知っていたのだ、東美濃という地域の重要性を。

だからこそ、信長はなんとしても東美濃を得ようとした。手始めに調略を行なったのだが、これが功を奏す。加治田一帯を治める、佐藤家を味方につけたのだ。また、佐藤家の中核的な城、加治田城は、ただの城ではなかった。城跡から、切岸や曲輪、虎口、堅堀など、防御のために凝らされた工夫がいくつも見受けられたのだ。これらが加治田城を、文字通り要害堅固な城にしていた。佐藤勢とこの城を信長方に引き入れられたことは、非常に大きかっただろう。

調略を成功させ、満を持して東美濃攻略にかかった信長は、堂洞城を攻めにかかる。ここで、信長は周到な攻勢をかけた。津保川対岸に別働隊を配置し、救援に來た軍を阻んだのだ。これによって、堂洞城は孤立無援に陥る。そして、堂洞城攻めにおいて、信長は陣頭に立って指揮をとったと考えられている。「信長記」に信長は「高き塚」に陣を置いたとの記述があり、これが富加町の夕田茶臼山古墳と推測されているからだ。この古墳と堂洞城は目と鼻の先だ。「高き塚」が本当に夕田茶臼山古墳だとしたら、信長のこの攻勢に対する相当な熱意が伝わってくる。これも、堂洞城が位置する東美濃の重要性を認知していたからだろう。

このようにして信長は攻め進み、東美濃攻略を成功させた。この地を足がかりに得た信長は、2年後に稲葉山城を陥落させ、美濃国の攻略にも成功する。

目前にある敵の本拠地から攻めるのではなく、国にとって重要な地を抑えることで、確実に敵の力を削いだ東美濃攻略。このことから信長は、物事を大局的に見ることもできる武将だったことは明らかだ。足利義昭から、官位ではなく大津、堺、草津の支配許可を得たこと。南蛮貿易を推奨し、キリスト教布教を許したこと。これらも、この大局観に基づく行動だろう。この大局観、これこそ信長を信長たらしめるものだ。

そしてこの大局観は、支配地の外にも向けられる。信長は、自分の領土内だけでなく、日本に目を向けた。戦国時代、多くの武将は自分の領地を守るために戦っていたが、信長は違った。天下布武を唱え、積極的に他国に攻め入っている。

戦国という時代を語る上で欠かすことのできない武将、織田信長。この武将は、おそらく初めて天下統一を考えた武将だった。そしてその考えは、確かな大局観によって支えられていたのである。

(「2019 朝日大学・戦国武将作文コンクール」 最優秀賞)

織田信長、語られない天下布武の第一歩

山内康誠

(地域研究部 2 年)

織田信長といえば、あなたは何を思うだろう。桶狭間の戦いや長篠の戦いだろうか。実際、それらの戦いは信長の天下布武の夢を現実に近づけた重要な戦いであった。だが、それらの戦いは信長の天下布武の夢を現実に近づけただけで、最も重要な戦いではなかった。私は東美濃攻略戦（現在の岐阜県中濃地区）こそが信長の天下布武に向けた第一歩であり、最も重要な戦いであったと考える。東美濃攻略戦の主な舞台である富加町は私の住む関市に隣接する。信長の東美濃攻略戦について書かれた資料や本に目を通すと私はいくつかの矛盾点に気づき、実際に現地に城や古戦場を訪ね、富加町教育委員会の島田崇正さん、山内正明さんからお話をうかがい、自分が感じた疑問や矛盾点を解くことにした。

一つ目の疑問は、なぜ織田信長は美濃を攻めたのかについてである。これは、専門家の中ではすでに解決されたものとして扱われている。谷口克広氏の「信長の天下布武への道」（吉川弘文館 2006）では、斉藤義龍が死んだから信長は美濃を攻めたとされている。だが、ここで、私は矛盾を感じた。義龍が死んでも、家臣団は健在であり美濃は強い。事実、信長は義龍の死後に美濃を攻めたが榑海の戦いで敗れている。よって義龍の死はきっかけにすぎず、決定的要因とはいえない。

私は、尾張の事情が関わっていると考え。以前から美濃は尾張の反信長勢力と手を結んでいた。美濃と手を結んだ反信長勢力がいたせいで信長は他国を攻めることができなかった。他国を攻めたくても美濃と手を結んでいる反信長勢力を気にしなければならなかつ

たからだ。だから、義龍が死んで尾張の反信長勢力が混乱している間に完全に美濃との関係を断ち切らせるために美濃を攻めたと考えられる。よって信長が美濃を攻めた理由は、美濃と尾張の反信長勢力の関係を断ち切らせようとしたのが目的であり、義龍の死はきっかけにすぎない。

さらに私は、美濃の資源に注目したい。美濃の中でも信長が攻略を狙った東美濃は、長良川と木曽川が流れており、中山道があり、陸上交通でも河川交通でもよい場所に位置している。また東美濃には刀剣で有名な関町があり、全国的に見てもトップクラスの実力を持った鍛冶師が集まっていた。美濃には豊富な資源があるため、時間が経てば経つほど武器や人が美濃に集まり美濃の力が強くなることを信長は恐れていただろう。

実際、美濃の資源と兵力を手に入れた信長は、それまで以上に統一戦争を有利に進めることができた。織田信長の家臣たちも関の刀を愛用するようになっただろう。

以上の理由により私は、義龍の死はきっかけにすぎず、本当の理由は美濃と尾張の反信長勢力の関係を切らせることと、美濃の豊富な資源を手に入れて美濃を天下布武の足掛かりの地にすることだと考える。

二つ目の疑問は、堅固な城や有力な武将に恵まれていたはずの美濃がなぜ信長に負けたのかである。このことについて触れている本がなかったため私は現地にフィールドワークへ行った。前掲の谷口克広氏の著作には、「東美濃から攻める作戦を思いつく前までの信長は父、織田信秀の作戦を受け継いで西美濃から美濃を攻めていた」と書かれている。このことから私は、東美濃の人々は織田軍を迎え撃つ準備ができておらず、不利な体勢で戦ったため負けてしまったと考える。

さらに、信長が東美濃を攻める際には、尾張の反信長勢力である犬山城を落とす必要があったが、木曽川と堀に囲まれた犬山城は容易に攻められない。だから、東美濃の人々は油断していたと考えられる。そこで、信長はその油断を逆手に取り、犬山城を攻め、勢いそのまま東美濃にも攻め込んだ。

信長侵入に際し、大きな出来事が起きた。加治田城（富加町）の佐藤が裏切ったのである。私は、この出来事が信長の東美濃攻略の一番のカギだと思う。「現代語訳信長公記」（太田牛一、中川太古訳、新人物文庫2013）には、「織田信長はかねがね、美濃の国内に味方が欲しいと願っていた時であったから喜ぶこと一通りではなかった」と書かれている。また、私は加治田城にフィールドワークに行き、虎口や堅堀、堀切などが至る所に作られ、城主が領民と土地を守るのに必死だったということを肌で感じる事ができた。戦国時代の武将は自分の領民と土地を裏切りをしてまで守ろうとしていた。見方を変えると、信長はそうした武将の必死な心情に付け込んだと思う。以上のことより、東美濃の人々の油断や加治田城の佐藤の裏切りを上手く利用した信長の策略により、美濃は負けたと考える。

これら二つの理由から私は、東美濃攻略が信長の天下布武の足掛かりの中で最も重要であり、第一歩でもあると考える。だが、信長の東美濃攻略についての資料は少なくまだまだ謎も多い。だから、今後も東美濃攻略についての研究を進めていきたい。

関市に残る明智伝説

山内康誠 藤井大輝 小山政亮 （地域研究部 2 年）
早川千景 （関市役所）

はじめに

「...信長は、京都をおさえ、近畿・東海・北陸地方を支配下に入れて、統一事業を完成しつつあったが、独裁的な政治手法はさまざまな不満も生み、1582（天正 10）年、毛利氏征討の途中、滞在した京都の本能寺で、配下の明智光秀に背かれて敗死した（本能寺の変）」。

（『改訂版詳説日本史 B』山川出版社 2020）

高校日本史教科書にも「反逆者」「謀反人」として登場する明智光秀。2020 年 NHK 大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公として描かれ、「生誕地」として知られる岐阜県内の大垣市、山県市、可児市、恵那市では、大きな話題となり盛り上がりを見せている。

ところが、いずれの「生誕地」も一次史料にはまったく登場しない。「生誕地」の根拠とされる史料は、江戸期の軍記物語や家系図、地元に残る口碑・口伝の類、すなわち後世の二次史料ばかりである。これに対し一次史料とは、当事者や関係者がその時々に残した手紙、文書、日記などの同時代史料をさす。光秀に関する一次史料はいずれも織田家仕官後のものであり、その前半生に関わる史料は、前掲の通り、『美濃国諸旧記』（17 世紀中頃）や『明智軍記』（17 世紀末前後）、諸家に伝わる家系図など、二次史料（後世書かれた軍記物や家系図、伝承）ばかりである。

もちろん一次史料にも誤認や作為はあるし、二次史料の中にも貴重な情報が含まれている可能性はあるが、二次史料を利用した歴史復元には、小説やドラマの世界ならまだしも、歴史研究の分野では慎重を期さなければならない。

2020 年 2 月、関高校地域研究部は、関市企画広報課から「明智光秀と関の刀剣の関わりを調べてほしい」との依頼を受けた。さっそく関市立図書館や岐阜県図書館で関連書籍を調べたところ、「明智光秀、柴田勝家、細川忠興、黒田長政ら名だたる武将が、関の刀匠・和泉守兼定の刀を所持していた」との情報を得た（本阿弥光遜『日本刀の掟と特徴』美術倶楽部出版部 1958、福永酔剣『日本刀大百科事典 2』雄山閣 1993）。

さらに我々は、東巻師の遠山康男氏（関市在住）のご教示により、東京国立博物館に「明智拵」（あけちこしらえ）と称される 16 世紀の打刀が保管されていることを知った。美濃で量産された実用品、末関物（すえせきもの）と考えられるこの刀には、確かに桔梗紋の意匠が用いられているが、明智光秀もしくは一族の秀満（光春）の所持刀であるとの話は伝承の域を出るものではない。

前掲の兼定と光秀の逸話も出典が不明であり、本阿弥光遜や福永酔剣の著作以外に記載が見当たらなかった。兼定と光秀との関係には地元関市からも期待が集まっているが、現状では、兼定と光秀の関係も、明智拵についても、これをただちに史実として扱うわけにはいかない。

以上の通り、刀剣に関する調査はまったくの「空振り」に終わったが、関やその周辺に関わ

る郷土史の史料を読み進めるうちに、意外なことに、関市にも明智氏や光秀に関する伝承が残されていたことが明らかになってきた。

本稿では、関市に残る明智氏の伝承についての我々の知見を報告したい。

明智光秀の出生について

先にも述べたが、光秀に関する一次史料はいずれも織田家仕官後のものであり、その前半生についての詳細を確たる史料で裏付けることはできない。美濃守護土岐氏の一族で足利將軍家に仕えた奉公衆の土岐明智氏嫡流（もしくは嫡流に近い出身）とみなす説があるが、土岐明智氏であったとしても庶流に過ぎないとする説、名門土岐明智氏の没落・断絶に付け込んで家名を篡奪した美濃の土豪とする説などがあり、いまだ確定的ではないのが現状である。

明智の家名由来の地名に関しては、恵那郡明知（恵那市）と可児郡明知（可児市）の2説があるが、前者は中・近世を通じ遠山（遠山明智）氏の支配下にあり、土岐氏庶流の明智（土岐明智）氏とは無関係である。「光秀の産湯」「光秀の学んだ学問所」などが伝承として伝えられているが、いずれも地元に残る口碑に過ぎず記録にはない。

後者は平安期より知られた明知荘の所在地であり、その意味では名字の地にふさわしいが、①明知荘文書に明智氏が登場しない、②土岐文書に可児明知荘が登場しない、③居城とされる明知長山城に明瞭な遺構が見られないなどの点に疑問を残す。恵那は無論のこと、可児も確定的な「生誕地」としてみなすわけにはいかない。

明智氏の本家土岐氏は戦国動乱の中で没落した。1552（天文21）年、斎藤道三が守護土岐氏を追放した際、土岐明智氏当主定明は殺害されたが、子息定政は徳川家康に仕え、さらに家康の命により土岐氏に改姓した。のち上野沼田に封ぜられたため、系図を上野沼田土岐家譜、文書を土岐文書と呼ぶ。幕府と地方武士との関係を知る上での一級史料である。

『続群書類従』所収の明智氏家系図によれば、光秀は定政の「又従兄弟」に位置付けられている。『続群書類従』所収家系図は土岐文書をもとに元禄の頃に作成されたもので、他の系図と比べると信憑性は高いとされるが、光秀と定政の直接的な血縁関係を示す一次史料はなく、これをただちに史実とみなすことはできない。

以上に見た通り、織田家仕官前の光秀に関する確かな史料はほぼ皆無であり、「生誕地」を確定する状態にはない。

洞戸に残る明智伝説

我々は、図書館で郷土史関連の文献を調べていくうちに、偶然、光秀と関市の関わりについて触れた書籍、犬山藩士間宮宗好の著作『美濃雑事記』の記述にめぐり会えた。文化年間（1804～1818）、美濃各地を訪ね歩いた間宮は『美濃雑事記』の中で、武儀郡洞戸村（現在の関市洞戸）で明智光秀の子孫と出会った出来事を次のように書き記している。

「洞戸村に不立（ふりゅう）という禅僧がおり、彼は明智光秀の曾孫であると称している。光秀は山崎の合戦で敗れたのち、洞戸に隠れていた。関ヶ原の戦いに際し徳川家康に加勢しようとして出発し、川で溺死したのだと言っているが、真偽は定かではない。」（現代語訳）

この伝説の骨子は、隣接する山県市中洞（旧美山町）にも残されており、中洞で少年時代を過ごした光秀は、峠道を越えた菅谷（現在の関市洞戸菅谷）で薪を拾う日々を送ったという。山県市中洞の光秀伝説については、武家にまつわる軍談や随筆を集めた『兵家茶話』（日夏繁

高著、18 世紀前半）や『翁草』（神沢貞幹著、18 世紀末）にも記載がある。

峠をはさんだ中洞の伝説が洞戸にも波及したか、あるいは洞戸が起源か不明であるが、ともに武儀郡内、しかも峠をはさんだ隣接地である。何らかの事情により、武儀郡の山間地に光秀伝説が形成されたものと考えられる。間宮が訪ねた禅寺とは菅谷の保福寺（臨済宗妙心寺派）の僧のことであろう。保福寺は 14 世紀末にさかのぼる臨済宗の古刹である。臨済宗は明智光秀や土岐氏と関わり合いの深い宗派であり、光秀伝説の形成に深く関わっているかも知れない。

「明智氏一族宮城家相伝系図書」と関市神野

前掲の『続群書類従』所収の明智氏家系図は、土岐文書をもとに作成されたと考えられ比較的信憑性が高いとされるが、東京大学史料編纂所にはこれとはまったく異なる内容をもつ家系図が保管されている。「明智氏一族宮城家相伝系図書」と称される家系図がそれであり、江戸後期に書かれたもので 17 世紀末をさかのぼることはない。記載内容の信憑性の薄いものとされる。

この家系図の割注によれば、『続群書類従』所収系図の光秀の先祖のうち、4 代前の頼定が武儀郡神野に住み、7 代前の頼秋が同じく神野と小瀬を支配していたと記されている。たとえこの記載が後世の創作であったにせよ、なぜ、神野の地が選ばれているのか。伝説の舞台にふさわしい歴史的背景が神野にあるのではないか。そんな疑問を抱いた我々は、神野の所在する関市富野の地区委員会の方々とともに、一日フィールドワークを行った。残念ながら、神野とその周辺部に、明智氏との関わりを示す史料や史跡を見出すことはできなかったが、史料の少ない美濃の中世史を知る上で重要な地であることがわかった（『関高 SGH 情報 10 号』2019）。

https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf/2019/2019_sghjoho_10.pdf

『岐阜県史』や『関市史』によれば、富野地区には平安期成立の摂関家ゆかりの荘園が 3 か所（志津野・神野・貝小野）、室町期にさかのぼる神社が 3 か所（上大野神社・小野神社・間関住吉神社）、南北朝期に名僧峯翁祖一によって創建されたと伝える臨済宗寺院が 3 か所（大通寺・大禅寺・吉祥寺）、平安期の仏像が 2 体（霊松寺・大禅寺）、鎌倉期の仏像が 1 体（霊松寺）確認されている。こうした豊富な地域の歴史遺産、それを生み出した地域の歴史が、のちの世の人々の好奇心をかきたて、光秀伝説形成の背景のひとつになったのではないか。

土岐文書と武気庄（むげのしょう）

前述の土岐文書には、足利尊氏やその弟直義、義詮、義満、持氏といった幕府の中樞を担った人物たちが、明智（土岐明智）氏の当主に対して現在の中濃地区を所領として認める旨の公文書が含まれている。土岐文書によれば、明智氏が認められた美濃国内の所領は、土岐郡妻木、武儀郡（武気庄、武義庄と表記）、多芸郡であり、現在の東濃・中濃・西濃の 3 地域に明智領が形成されていることがわかる。このうち武儀郡は、現在の関市・美濃市を中心とした中濃地区にあり、現在の加茂郡神湊、美濃加茂市伊深、山県市中洞、下呂市菅田なども含む広範な領域に広がっていた。

土岐文書にあらわれる武気庄の地名としては、野所（のどころ）、安（やす）、弘見（ひろみ、もしくは安と弘見をひとつの地名とみなして安弘見=あびろみ）、加藤（かふじ、現在の加茂郡七宗町神湊=かぶち）があげられる。弘見（もしくは安弘見）は、平安末の荘園として知られ

る宇多弘見（うだひろみ）荘のことをさすと考えられる。この荘園は、現在の関市広見から武芸川の一部を含む。安弘見をひとつの地名とせず、安と弘見を別々の地名と考えるなら、安の候補地のひとつとして、美濃市安毛（あたげ）を想定し得る。安毛は長良川本流と支流の板取川の合流点に位置する集落で、交通の要衝に位置する。

土岐文書の記載以外に、広見と明智氏との関わりを示す史料は見られないが、現在も残る天神神社（弘見天神、室町期の神名帳に記載あり）と松見寺（臨済宗相国寺派、尊氏祖母の建立伝承あり）は、この地が明智領であった時代、すでに存在していたと考えられる（『関高 SGH 情報 第 48 号』2019）。

https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_48.pdf

野所の候補地としては、我々は先ほど触れた富野地区一帯を想定している。富野は明治に誕生した新しい地名であるが、地区内各所には、神野・小野・大野・志津野と、野のつく地名がある。このうち志津野・神野・貝小野には摂関家系の荘園が設置されていたし、大野には室町期にさかのぼる古社（上大野神社）もある。野所の候補地にふさわしい集落と言えよう。

むすびにかえて

関市企画広報課からの依頼によってはじまった明智探究は、一時頓挫しかかったが、地誌や家系図、古文書などを調べ始めると、意外にも関市と明智氏の関わりを示す史料があることがわかった。もちろん二次史料を鵜呑みにはできないが、土岐文書のような良好な一次史料や、伝説の地を訪れると必ずと言っていいほどある古寺社など、明智伝説が形成されるに十分な「素材」を確認できた。今後は「いかなる経緯で伝説が形成されたのか」、伝説形成の過程や背景を史料を駆使しながら跡付けていきたい。

なお、本稿発表に先立ち、「広報せき」（2020 年 3 月号、関市企画広報課）誌上で、我々の調査に関する簡単な報告を行った。あわせて参考にされたい。

関市富野地区フィールドワークの報告（2019年6月16日）

◇ 富野地域委員会、関市企画広報課の方々と地域の歴史を学びました！

日時：令和元年 6 月 16 日(日) 10:00 ～ 16:30

参加：関高校地域研究部 5 名、富野地域委員会 5 名、関市役所 3 名

内容：関市富野地区の史跡探訪を通じ、地域の歴史を学ぶ。地域の方々との交流の中で、貴重な文化財の保存や活用について考える。

◇ 関市の地域委員会とは何か ～住民主体で地域課題を考える～



関市の地域委員会とは、市内各地域それぞれの特性をいかして住民主体の地域づくりを行う組織のことです。地域の課題は地域で検討・解決し、将来にわたって持続可能にしていくため、住民の力を最大限に発揮するための組織で、おおむね小学校区を単位にして、様々な団体や事業者が参加しています。

地域には住民の安全・安心の確保、生活の利便性の向上、美しい自然環境やまちなみの保全、高齢者や障がいを持つ方への支援、子育て支援、青少年健全育成、産業の活

性化、祭りや地域文化の伝承など、地域住民に広くかかわる公共的な活動がたくさんあります。地域の歴史の再発見、歴史遺産の保全や活用も、重要な地域課題のひとつです（以上、関市HPの記載より）。

市内の富野地区では、地域委員会が中心となり、富野のシンボルと呼ばれる小野山城（本城山城、戦国期の山城）に関する調査研究・保全活用が進められています。メンバーの中には、関高校地域研究部の前身、社会研究部の先輩方もいらっしゃいます。今回、地域研究部は、富野地区の地域委員会や関市企画広報課の方々と協議の上、富野地区の中世史の調査を行うことにしました。富野地区は市内でも中世の史跡が集中する特異な地域として知られています。以下、当日の様子です。

◇ 当日のようす

午前 10 時、富野ふれあいセンターに集合。自己紹介と打ち合わせを行い、最初の訪問地、大野神社に向かいました。おそらくは 10 世紀半ばにさかのぼる古社で、室町時代から現代にいたるまでの棟札（建築・改築記念の札）が多数保管されています。地元の石原さんからは、神社や地域の歴史に関するお話をうかがいました。隣接する臨済宗大禅寺では、開山峯翁祖一の位牌のほか、位牌堂の木製如来像を見学しました。

そのあと小野地区に向かい、地元の大野さんの案内で小野神社を見学しました。この社も室町時代の神名帳に記載があります。寺院（曹洞宗宝泉寺）が隣接する立地のあり方は、大野神社と大禅寺の関係を思わせます。地方における神仏習合を考える上で、寺社の立地も見逃せない論点になりそうです。





藤谷地区の公民館で昼食をとったのち、地元の川合さんの案内で大通寺跡と白山神社を見学しました。大通寺もまた臨済宗寺院ですが現在は廃寺となっています。かたわらに開山峯翁祖一の墓石があることを確認しました。

かつて白山神社に収められていた円空仏を麓のお堂で見学したのち、坊地地区の臨済宗霊松寺を訪問。この寺院には市指定文化財の仏像が2体保管されています。十一面観音立像は平安前期、阿弥陀如来立像は鎌倉期の所産と考えられています。最後に志津野地区の臨済宗吉祥寺を訪問し、歴史に詳しいご住職より、峯翁祖一にまつわる様々なエピソードや仮説について、うかがうことができました。

◇ 歴史遺産の探究と保存・活用

富野地区には平安末に成立した摂関家の荘園が3か所、古社が3か所、南北朝期に創建されたと伝える臨済宗寺院が3か所、確認されています。地方の山城としては比較的規模の大きな小野山城があるほか、この地が明智家の所領であったことが江戸期の系図に記載されています（明智氏一族宮城家相伝系図書）。

富野地区は岐阜県の中世史、郷土史を研究するうえで、格好のフィールドといえます。

今回の調査を通じ、寺院や神社に伝わる貴重な文化財を調査し保管している関係者の方々、ジオラマや道標を作り小野山城の保存や活用を進めている方々と出会い、地域ならではの活動の様子をはじめて知りました。それと同時に、「地区内には眠った資料が多く存在しているのではないか」「こうした地域の遺産を広く公開し、活用する道を早急に探るべきではないか」と考えました。

地域研究部は、まずは富野地区の歴史を丹念に調べ、埋もれた史実の掘り起こしや今までに知られた史料の再検討を続ける予定です。さらに、研究成果を地域や市役所の方々と共有し、保存や活用の在り方も探っていきたいと思います。



◇ 生徒の感想

富野地区で一日、フィールドワークをした。貴重な仏像や棟札など、それも平安や鎌倉、室町時代にさかのぼるものが、地域のお寺や神社に複数あったことに驚いた。近くに住んでいるのに、こんなことは全く知らなかった。きっと、僕たちが知らないこういった貴重な文化財が、まだまだ地域のどこかに眠っているのだろうと思う。

さらに、この地域は、土岐氏や明智氏と何かしら関係性があるのかもしれないということも、今回のフィールドワークでうっすらと見えてきた。桔梗の紋がある寺院、江戸期の系図にある明智伝説、かつての土岐氏や明智氏の美濃支配など、これらが何かで結びついているのか、また、仮にその結びつきがあったとしたならば、それはなぜ、どのようにして結ばれていったのか、謎は深まるばかりである。これからの研究が楽しみだ。

富加町フィールドワークの報告（2019年7月7日）

◇ 富加町教育委員会の方々と史跡を見学し、地域の歴史を学びました！

日時： 令和元年 7 月 7 日(日) 8:00 ～ 14:00

案 内： 富加町教育委員会

参 加： 関高校地域研究部 5 名、岐阜大学学生 1 名、関市役所 2 名

内 容： 織田信長による中濃攻略戦に関わる山城や古戦場をめぐり、地域の歴史について考える。あわせて、地域の歴史資源の活用について考える。

探訪先： 加治田城址、旧加治田城下町、夕田茶臼山古墳(織田信長本陣推定地)、堂洞城址、恵日山(海老山、織田信長本陣推定地)、春日神社、関城址(安桜山)

◇ 富加町の歴史を現地で学び、歴史遺産の活用について考える



加茂郡富加町は、夕田茶臼山（ゆうだちやうすやま）古墳や半布里（はぶり）戸籍をはじめとする歴史遺産に恵まれた町として知られています。

数ある史跡の中で、私たち地域研究部は、中世山城の加治田城や堂洞城に着目しました。織田信長は美濃攻略にあたって、まずは中濃地域にくさびを打ち込みました（『信長公記』）。加治田城や堂洞城は、信長の中濃攻略作戦の古戦場であり、富加町では遺跡の現状を把握するとともに、教育や観光などの分野における活用を図っ

ています。

今回、私たちは、富加町教育委員会の島田崇正さん、山内正明さんの案内で、信長による制圧作戦に関わる古戦場をめぐりました。文献史料から遺跡の現状をどう読み解くか。おふたりによれば、信長の時代からすでに450年を経た今日でも、史料の再検討や遺跡の調査により、新たな事実が判明することがあるそうです。今回のフィールドワークは、歴史の証人でもある貴重な文化財を守る意義について、あらためて考える機会となりました。

◇ 生徒の感想

■ 今回のフィールドワークで改めて感じたこと、それは、信長はやはり賢い武将だということである。信長は美濃攻略の際、敵の本拠地を初めから攻めるのではなく、あえて東美濃から攻略を開始した。交通の要所である加治田や、日本刀の生産地であり経済活動が盛んな関、これらの地域の重要性を理解していたからだろう。こうした、戦いにおいての強さだけでなく、賢さを持ち合わせていた信長だからこそ、有力な戦国大名に成り得たのだと思う。



加治田城主、佐藤紀伊守も同様である。今でこそ、信長は戦国時代随一の大名として知られてい

るが、美濃攻略を始めた当時は、尾張を領するだけの一大名だ。そんな時に、周りを裏切って信長につくという判断を下した佐藤紀伊守。非常に先見の明を持った武将だと言える。

このように、当時の人々が関わった地域や史跡を訪ねることで、その人の考え方まで見えてくるのがとても面白い。これから調べていく明智光秀も、研究をする中で、きっと、今の僕がイメージとは異なることが見えてくるだろう。これからの研究が楽しみだ。



■今日のフィールドワークでは、信長が始めに東美濃を攻めた理由がよくわかりました。一方、自分たちの領地を守ろうとした領主の奮闘を、山城に行くことで肌で感じることができました。また、自分の住んでいる土地にも信長が攻めてきて、地元の領主と戦っていたと思うと感動しました。

今回のフィールドワークで、信長ばかりに光があたりがちだけど、領地を守ろうと頑張っていた領主の戦略が肌で感じられたし、自分の住んでいるところにも信長が来ていたと思うと自分の住んでいる土地に誇りがもてました。

今日一日、ありがとうございました。



朝日大学戦国武将作文コンクールの報告（2019年9月7日）

◇ 地域研究部の生徒2名が、最優秀賞・優秀賞を受賞しました！

日時：令和元年9月7日(土) 場所：瑞穂市総合センター

主催：朝日大学 後援：岐阜県教育委員会 NHK 朝日新聞 岐阜新聞

内容：表彰式 公開講座

◇ 受賞作品の研究内容

関高等学校地域研究部では、関州市制70周年イベント（戦国☆甲子園）に備え、関市やその周辺地域の戦国時代の歴史について、フィールドワークや勉強会を行っています。このたびの戦国武将作文コンクールにあたり、部員2名が、富加町におけるフィールドワークの成果をもとに作文を執筆し応募したところ、石原伶緒さん（2年生）と山内康誠さん（1年生）が、それぞれ最優秀賞、優秀賞を受賞しました。

石原さんの「東美濃攻略から見る織田信長」、山内さんの「織田信長、語られない天下布武の第一歩」とともに、フィールドワークの知見や読書の知識を生かした作文で、オリジナリティにあふれたものでした。

午前中の表彰式に続き、午後の部では、本郷和人氏（東京大学教授）から「明智光秀を学ぶ」、巽昌子氏（東京大学特任研究員）から「古文書からみる分国支配」と題した講演が

ありました。公開ディスカッションでは、本郷氏、巽氏、本校生徒2名を含む高校生が登壇し、織田信長が美濃国を攻略した理由、その足がかりとなった東美濃へのフィールドワークをもとに書かれた受賞作について意見が交わされました。

◇ 生徒の感想より

■ 富加町のフィールドワークから考えた信長像についての作文で、朝日大学の戦国武将作文コンクール最優秀賞を受賞した。そして、同大学で行われた表彰式、明智光秀についての公開講座に参加した。

公開講座では、東大史料編纂所の本郷和人先生、巽昌子先生のお話を聞いた。明智光秀について、今まで知らなかったことをたくさん聞くことができた。

また、「信長の考えた天下とは日本のことである。信長は自分の領地を守るためではなく、天下布武、天下統一を成し遂げるために戦っていた」。本郷先生が、このようにおっしゃっていた。僕も同じことを考え、作文にも書いていたので、すごく共感でき、嬉しかった。

2人の先生方がおっしゃっていた、歴史の研究はフィールドワークが大切だということ、先人の意見を踏まえながら自分の考えを積み重ねていくこと、これら2つを忘れず、今後の研究に励んでいきたい。

今回こうして研究したことを文章にすることが、とても楽しかった。理解の助けにもなることだから、これからも研究内容を文章にまとめてみようかと思う。



関市・山県市フィールドワークの報告（2019年12月25日）

◇ 関市観光協会・企画広報課と合同フィールドワークを行いました！

日時：令和元年12月25日(水)

場所：関市広見・洞戸・武芸川地区、山県市中洞地区

参加：関高等学校地域研究部・放送部 関市観光協会 関市企画広報課

◇ 明智伝説の謎解きの開始

地域研究部では、関市の依頼を受け「明智光秀・明智一族と関市との関わり」についての調査を行っています。令和2年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる！」によるブーム到来にあやかっただけの観光資源開発が発端ですが、調査を開始すると意外な史料が次々と浮かび上がってきました。

<その1 洞戸の光秀伝説>

犬山藩士間宮宗好がまとめた『美濃雑事記』(1816)には、洞戸に明智光秀が住んでいたとの伝承が記録されている。伝承の内容は峠をはさんだ山県市中洞に残る伝承とほぼ同じであ

る。中洞にも「峠を越えた洞戸の菅谷で光秀が薪を拾った」との伝承がある。中洞と洞戸は隣接しておりともに旧武儀郡に属する。同一の伝承が広がっていたと考えてよい。

＜その2 家系図伝承と神野・小瀬＞

「明智氏一族宮城家相伝系図書」(江戸期の家系図)には、系図上、光秀の遠祖にあたる人物(4代前の頼定、7代前の頼秋)が、現在の関市神野・小瀬を統治していたとの記載がある。

＜その3 土岐文書と広見＞

徳川幕府の譜代大名であった土岐家に伝わる中世文書(土岐文書)には、南北朝期から室町初期にかけて、現在の関市広見とその周辺が、明智氏の所領であったことが記されている。歴代将軍からの所領安堵状であり、明智氏が幕府と近い間柄であったことがわかる。

その1・その2は、伝承や後世の家系図に基づくものであり、資料としての信憑性は希薄ですが、その3は当時の地方武士と室町幕府との関係を伝える良好な史料であり、明智氏が関市の一部を統治していたことは間違いありません。史実と伝承との間に何らかの関わりがあるのか、あるいはまったくないのか。地域研究部では現在でも調査を継続しています。



関市広見の天神神社

◇ フィールドワークのようす

文書や伝承の舞台に、当時を伝える痕跡が残っていないか。地域研究部で調べたところ、明智氏と直接結びつくような史跡は見当たりませんでした。

ただ、神野とその周辺(富野地区)には、鎌倉末期にさかのぼると考えられる臨済宗寺院や古代・中世の仏像、古社、荘園の所在が知れる古記録が残されています(「SGH情報」第10号で報告)。

今回、フィールドワークを行った広見地区にも、実際出かけてみると、15世紀にさかのぼる古社(天神神社)や鎌倉末期に建立されたという寺院(松見寺)がありました(写真右)。臨済宗相国寺派の松見寺は、伝承によれば、足利尊氏の祖母にあたる人物が建立したと言い、現在は無住の寺となっていますが、本堂には優美な本尊や三十三観音が安置されていました。室町時代の「美濃神名帳」に名を残す天神神社も、まったく新しい社殿ではありませんが、付近一帯を見渡すことのできる小高い位置に所在しています。ともに、このあたりが明智領であった時代からの寺社です。



一方、洞戸の菅谷にも伝説の舞台となった保福寺（臨済宗妙心寺派）があり、寺伝によれば、創建は室町初期にさかのぼることでした。伝説の舞台となった地には、中世にさかのぼる古い寺社が必ずと言ってよいほど残されています。

最後に、山県市中洞の桔梗塚（伝光秀墓）と白山神社を訪れました。大河ドラマ放映が近いということで、駐車場が整備されのぼり旗が飾られていました。

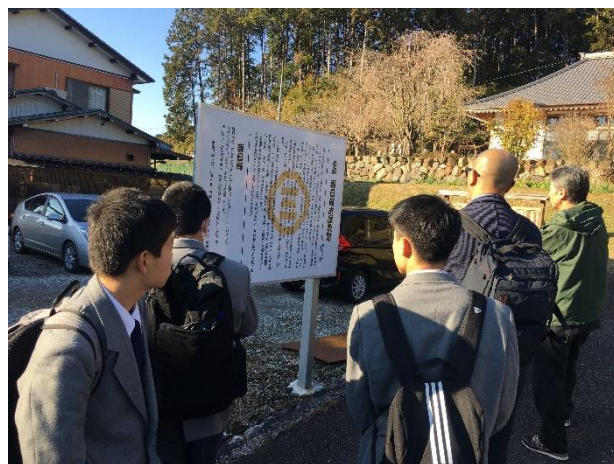
現状では、伝承と史実の関係の究明よりも、大河ブームに便乗した観光開発が優先されているようです。

◇ まちづくりは、まず地域の歴史を知ることから

関市観光協会の観光アドバイザー柳田佳彦さん、関市企画広報課の山田和義さんから、フィールドワークの最中、様々なお話をうかがいました。おふたりからは、関高地域研究部の「探索能力」の高さを評価していただきました。私たちは、史実と伝説の境目をはっきりさせることを基本に研究を進めています。

今回のフィールドワークでも、明智家に直接つながる手がかりは見つかりませんが、伝説の舞台にふさわしい数々の文化財に出会うことはできました。こうした地域の素晴らしい歴史的遺産を、地域の方々にもっと知っていただくことが大切だと感じます。

今回のフィールドワークの成果は、「関市広報」誌上で発表されます。さらに、柳田さんや山田さんのアドバイスを受けながら、歴史探究の成果を動画などでわかりやすくする工夫を、放送部員と地域研究部員の合同作業で進めていく予定です。



関市武芸川の春日局屋敷伝承地

歴史マンガで郷土史を発信 ～みのかも定住自立圏事業～

島田崇正 （富加町教育委員会 文化財専門官）

文化財の「活用」について

近年、文化財保護行政に携わる者の多くが、文化財や地域史の「活用」に労力を注いでいます。ひと言で「活用」と言いますが実は曖昧で、意味するものが時代とともに変化しています。私が就職した 1990 年代半ば頃は、文化財をめぐる施策の中心は「保護」と「調査研究」だったと記憶しています。そして、その先に「公開」や「教育普及」があり、これを活用と捉えていました。それが 10 年前くらいからでしょうか、この柱に加えて、まちづくりや地域振興への活用へという事も高唱されるようになり、昨年 4 月の文化財保護法の改正で、その方向性が強く打ち出されました。未指定を含めた文化財を「まちづくりの核」とすることによって、社会総がかりで保護・継承に取り組む意識が醸成され、地方文化財保護行政の推進力の強化に繋がるという考え方が示されています。簡単に言うならば、今そこで暮らしている人々に愛着を持って貰わねば、長期的な保護には繋がらないので、文化財の魅力を様々な現代的手法や媒体を駆使して発信していくべきだという事です。

なるほど尤もだと思う反面、漠然とした違和感もありました。実際に活用の推進をめぐる様々な議論や反発もあったと記憶しています。文化財をまちづくりの核として据える考え方は、現代社会から文化財保護現場への要請であり、真摯に受け止めなければいけません。しかし文化財の「活用」を過度に経済振興や観光振興と結びつける価値観もあるように感じています。「文化財をまちづくりの核に」という部分は経済や観光振興と結びつきやすい概念ですので、強調し過ぎると問題もあるように思います。なぜなら、文化財を地域活性の「手段」と捉える考えが浸透してしまうのではないかと危惧するからです。観光振興の中で輝く文化財はとても魅力的で、そこにしか無い価値を表していますが、そうした文化財はごく少数です。客が呼べる文化財が価値のある文化財という考え方が定着してしまっただけでは、文化財総体の保護には繋がりません。むしろマイナスかもしれません。この辺りは文化財保護部局が抱えるジレンマであり、難しい部分ではあります。

このように逡巡していた私に、岐阜県の文化財保護行政の大先輩が、活用とは「文化財の公共性を高めること」だと教えてくださいました。そしてとても共感を覚えました。理性的な捉え方で、私の中でこの考え方を「活用」のスタンダードにしていこうと思っています。私はやはり、文化財や地域史は「プライスレス」だという価値観を共有していく事が、最も大切だと思っています。そのために、価値を発掘し、磨き、発信していく。この積み重ねが活用であり、長い目でみて、まちづくりにも繋がると考えるようになりました。

活用という用語は非常に曖昧です。最後は、あくまで保護と調査研究に結びつけなくてはなりません。ここが一番難しいですが、私たち学芸員のやり甲斐でもある部分なのです。地域史を研究し始めた皆さんは、どう思われますか。次に、私が勤務している富加町がどのような「活用＝公共性を高める施策」を行っているか、戦国時代の地域史を題材にご紹介したいと思います。

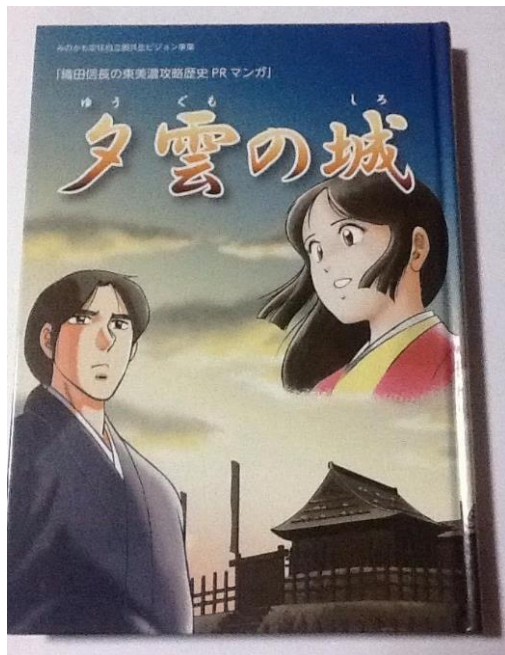
織田信長の東美濃攻略を題材とした歴史PRマンガ作成

一般的に、織田信長の美濃攻略は永禄10年(1567)に斎藤龍興の稲葉山城を落城させた戦いが知られていますが、その2年前に美濃勢と織田信長勢で繰り広げられた攻防戦において信長が勝利したことが、非常に重要な転換点となった事はあまり知られていません。その舞台となったのが現在の富加町・坂祝町・美濃加茂市、そして関市であり、最大の激戦地は富加町にある堂洞城でした。主人公は、この地に根ざした武将達であり、信長と戦う者、時勢を察して信長と結ぶ者など様々な生き様やドラマが「信長公記」や「堂洞軍記」という書物に遺されています。以前は、地元の古老がこの攻防戦を、まるで見てきたかの様に語ってくれましたが、年々忘れられていくのを感じていました。この歴史は、大河ドラマに取り上げられることはありませんが、ぜひ地域の人々や子ども達に知ってもらい、語り継いで欲しい地域の歴史でした。

この題材を発信することを考えてみると、幾つかの強みがある事に気づきました。ひとつは、誰でも知っている「織田信長」というキーワードを使える点、そして地域には文献・城郭・遺跡・伝承など関連する資料が遺っている点。私は、この価値を再度発掘し、磨き、発信していく事に大きな可能性があると感じました。

次にどのように発信するのか。今までに、展示会やリーフレット、HPなどを使っていますが、その媒体では広がらなかったのも同じ事をやっても意味がありません。そこで考えたのが「マンガ」という媒体にのせることでした。そして、この地域の歴史は富加町だけで完結する歴史ではないので、美濃加茂市と坂祝町に共同事業を提案しました。地域の歴史が3つの市町を結びつけるという姿はとても素敵なことだと考えたからです。

事業化が決定して作成に入る段になって、とにかく「こだわろう!」「良いものを作ろう」と思いました。そしてマンガは漫画家の渡辺浩之先生に依頼し、ストーリーや設定、絵の細部を何度も何度も打ち合わせました。とても楽しい時間でした。これは矛盾するようですが、マンガはあまり子供向けすぎず、大人も子供も満足するものにしたいと考えました。「これ子ども達は分かるかなー」と心配になることもありましたが、最終的には子ども達を侮ってはいけない、きっと理解できると信じました。



この作業の中でハッとさせられたことがありました。作者の渡辺先生から漫画には必ず読者へ伝えたいテーマがある。今回は何にするかと問われたのです。私は直ぐには返答ができませんでした。つまり地域の歴史から現代へ「何を問いかけるのか」という歴史家が考えるべき最も難解な問いを、この場面で考えることになったのです。本当にとっても特別な機会となりましたし、直ぐに答えを用意できない自分の未熟さを痛感しました。

もうひとつのこだわりとして、マンガとセットで資料集を付すことにしました。より理解を深めて欲しいという思いです。資料集は今までの成果の切り貼りや整理だけでなく、新たに原典調査を実施することにし

ました。例えば、「信長公記」は陽明本、池田家本、天理本など幾つもの写本が知られています。これを1つずつ実見してみるのです。そして、この調査の中で、「信長公記」天理本（天理大学附属天理図書館所蔵）などに今まで知られていない記述があることが分かりました。例えば、堂洞城攻め場面で、織田信長は最前線へ出陣し、「高き塚」から城攻めの様子を見て指示を飛ばしていたと記載されていたのです。塚とはマウンド状になった墓、つまり古墳を指すことが多いです。また、古墳は戦国時代の合戦で陣城に転用されることがしばしばあります。実際に堂洞城から400mほどの距離に「夕田茶臼山古墳」という前方後円墳があります。堂洞城を見通せる位置にある古墳（塚）はこの夕田茶臼山古墳の他にありませんし、背後の平地も見渡すこともできる絶好のロケーションです。この場所が合戦時に織田信長の居た場所の有力な候補地となりました。そしてマンガには、調査成果を反映し、夕田茶臼山古墳の辺りから指揮を執る信長を描いてもらいました。

正直、もう調べ尽くされた信長公記から新視点を導き出せるとは考えていませんでしたので驚きでしたが、この原典調査を通じて、新たな価値を発掘し、磨くことができたのではないかと考えています。

最後にタイトルは今後の活用を考えてキャッチーなネーミングにしようと、「夕雲の城」という小説風のタイトルを付けました。刊行後は「夕雲の城」を材料にしてゆかりの地巡りや歴史イベントの開催、大阪の講談師さんによる講談「夕雲の城」の上演などの活用事業を実施しました。また、地元の酒造場からは「夕雲の城」というお酒も発売されるなど、広がりも生まれてきています。

平成29年3月に刊行となり、美濃加茂市・富加町・坂祝町のすべての小中学生にプレゼントしました。また、一般にも500円で販売を始めたところ半年で完売となり、増刷をしました。

また、堂洞合戦に関わる3つの地域の小学校3校（蜂屋・富加・坂祝）6年生には、講談師による学校講談会を毎年開催しています。これは、講談師が語る「夕雲の城」の間違いを小学生が見破ることができるか！というワークショップ形式で実施しています。小学生は事前に「夕雲の城」をよく読んでおかななくてはなりません。いっぱい付箋が貼られた「夕雲の城」を見た時はとても感動をしました。

私は、文化財や地域史そのものをまちづくりに活用するというよりは、そこから生まれたストーリーを地域で共有し、まちづくりに活かす方向に進んでいけば良いなあと考えています。それが「文化財の公共性を高める」ことに繋がれば良いと思います。無理に整備をしなくても活用する術はたくさんあるように思います。

令和元年7月7日に関高校地域研究部の皆さんと富加町に所在する加治田城と堂洞城、合戦時の織田信長居所推定地である夕田茶臼山古墳などをめぐるフィールドワークを



学校講談会の様子



たくさん付箋のついた小学生の「夕雲の城」

実施しました。現地に立つ事でしか味わえない感覚を自分の中に落とし込む作業が歴史研究において最も大切な事だと感じてもらう事と、その感動を多くの地域住民と共有するために活用事業が大切であると伝えました。マンガ「夕雲の城」を片手に現地を巡る一風変わったフィールドワークでしたが、地域史が繋げてくれた楽しい機会でした。

そしてフィールドワークを基に、今年の3月21・22日には「夕雲の城フェス」という活用イベントを開催し、関高校の皆さんにはポスターセッションや研究発表、そして研究者とともにパネルディスカッションにも登壇してもらい、織田信長の東美濃攻略を語ってもらう予定でしたが、新型コロナウイルス感染症により中止となってしまいました。また、企画をしたいと思いますので、その時はぜひ協力をして欲しいと考えています。

おわりに

文化財や郷土史の活用は、地域の方に自分たちの足下を見つめ直してもらい、プライスレスな価値だと共有してもらうことだと思います。これが、少子高齢化や人口減少という現実的課題にどのように寄与するのか具体像を示すのは難しいですが、郷土を愛する心や、アイデンティティの拠り所がなければ地域は成り立ちません。愛することは知ることです。そのために我々文化財保護に携わる者は発信を続けていくと思います。

以上、拙い文章ですが寄稿文とさせていただきます。このような機会をいただきありがとうございました。

小野山城の保全・活用 ～岐阜県関市富野地区の活動～

川合治義 中嶋亘 （富野地域委員会）

はじめに

富野地区は、旧関市の北東部にあって現在の人口が1900人弱の農村地域です。すでに本誌で説明されているように平安期から中央緒勢力の荘園として開発されました。この関市富野地区の美濃市境となる標高423mの山が本城山です。本城山は富野小学校と中学校の校歌にも歌われてきた富野のシンボルです。また例年11月には富野小学校の5年生が「親子登山」を長年の恒例事業として続けています。

この山の頂上一帯とそこから伸びる七つの稜線に人工的な平坦地が多数あることは地元民に知られてきましたが、それが天文年間に美濃国で一、二を誇った大規模な山城＝小野山城の痕跡であることはあまり知られていませんでした。

注：この点については古田憲司氏『本城山城城主 齋藤八郎左衛門入道宗雄について』（岐阜県郷土資料研究協議会会報・第133号を参照願います。）

関市の自治基本条例の制定とそれに伴って発足した「富野ふれあいのまちづくり委員会」は、関市市民協働課の提唱した「地域の宝さがし・宝磨きあげ活動」の一環として本城山・小野城址の由来や歴史を研究し、地域の宝として発信するという方針に沿って粘り強く活動してきました。

この活動によって16世紀中葉にその山頂一帯に築かれた小野城の実態を解明して住民の共通認識とすることは、関市自治基本条例の前文に謳われた「わたしたちは、先人の英知によって築かれ、平成の市町村合併により生まれ変わったこのまちを誇りに思い、誰もが心豊かに安心して暮らすことができるまちとして、未来を担う子どもたちへ引き継ぎます」という一節にもかなうものです。今後も地元の歴史に詳しい住民、郷土史家、他地域の優れた経験さらには行政の担当部署の方々の蓄積された情報を頼りに小野城の研究を続けます。

いっぽう、特に令和になって、歴史研究だけでなく本城山への登山客を誘致するという面でも活発化し、登山道の整備、頂上周辺の曲輪（削平した陣地）に繁茂した藪の伐採、或いは堀切や竪堀、切岸などの機能を説明する立て看板の設置などで、登山者や山城愛好家に「天文年間の美濃で一、二の規模の山城」として小野城を強く訴えられるようになってきました。

なおこの本城山・小野城址へは麓の関市西神野八神上薬師堂脇からの1500mの登山道ピストンコースと下りには同地区大洞へ続く周回コースが開発・整備され、きめ細かい道標で安心して登山が楽しめます。またもう一つの





ルートとして、武儀町下之保にある「岐阜県最古の寺」日龍峰寺（高沢観音）から高沢古道、神野城址の大仏山を経た富野北アルプス縦走コースもあり、その場合には復路は藤谷白山神社と藤谷円空堂を経て日龍峰寺へ帰る7500mの周回コースもあります。

これらの登山ルートの整備とネットでの発信、さらには登山者や山城愛好家の体験談がネット上で広まるにしたがって登山者はますます増えてきました。昨年の秋から今年春にかけて本城山の麓の駐車場は名古屋市、小牧市、岐阜市などからの車が土日に限らず見られるようになっていました。また、日龍峰寺から富野北アルプス縦走コースを辿った登山者が藤谷白山神社を経て寺の駐車場へ帰る姿も土日を中心によく見られるようになってきています。

2018年の活動概要

2018年

- 6月 富野ふれあいのまちづくり委員会・地域活動部会において事業内容を「本城山・小野城の歴史の解明と発信」に決定した。
- 7月 地域活動部員を主に「小野城址由来研究会」発足させた。
(会長・佐藤平和、副会長・安田佳典、大野正幸 事務局・川合治義)
当面の方針として、小野地区と八神地区を重点に小野城の歴史に関する文献・資料の掘り起こしを目的に地域住民に協力を促すこととした。その席で美濃市の広報誌「広報みの」に小野山城址についての記事があり、その筆者は美濃市史編纂委員の古田憲司氏であるとの情報を得て、早速富野地域委員会主催の講演会の講師を依頼した。
- 9月 古田憲司氏による「小野城と城主齋藤宗雄について」と題した講演会富野ふれあいセンターで50余名の参加で開催した。
- 10月 富野ふれあい文化祭において、地元の山城愛好家の本城山・小野城想CGと、長年にわたって小野城址を独自に研究してこられた八神出身の郷史家佐藤末男さんの労作・本城山立体模型を展示し好評を博す。
- 11月 地域活動部会が呼びかけて9名の参加により、本城山山頂付近で展望台の樹木伐採、その後の小野城址の開発事業に着手した。
- 12月 本城山のドローン空撮写真を載せたクリアファイルを富野の全世帯（約680枚）へ自治会の協力で配布した。

城址活用の一例として愛知県豊田市の足助城址を25名で見学した。八神上の谷で城主の菩提寺であったと伝えられる「天国寺」探索した。八神下の松村氏家系図で『小野山城落城の後…惣十郎民家に交わり居住』との記述により齋藤八郎左衛門宗雄の小野城落城後の消息を確認した。観音切の吉祥寺や坊地の霊泉寺等の住職を訪ねてお話を聞き、墓地で古い石塔を

探索した。また霊泉寺以前に坊地の高台にあった寺跡も探索した。

富野小学校の庄司龍彦校長と6年生の児童全員で墨書きして頂いたプラカード型の道標20本を富野北アルプス沿道と八神上薬師堂までの登山道沿道に設置した。後に杭に墨書きした補助的道標を20本設置した。

2019年

1月 本城山頂上に、小野城址についてのスチール製看板を5名で設置した。自治会の協力により、本城山のドローン空撮写真を載せたクリアファイルを富野の全世帯（約680枚）に配布した。

2月 八神登山道で風倒木などをチェーンソーで切断し通行をより安全にした。
(川合治義)

2019年以降の活動の概要

2018年から富野地域に現存する歴史的遺跡の本城山を中心にスタートしました。2019年1月に先ずは頂上に告知看板を設置しました。これからはたくさんの地元の方々に本城山が周知され、多くの方に登山して頂きたく、地元の方が登りやすい西神野八神コースを主流に登山道の計測、手書き地図パンフレットを作成し番号記入して杭打ちをしました。



地域委員会、地元有志中心に随時登山道整備をして住民が気楽に登山しやすいように毎月1回「登山の日」を設定し、毎月発行のふれあい便りに告知するようにし、ふれあいセンターにおいて掲示するようにしました。今まで不便であった駐車場30台置ける場所を登山道入り口に確保しました。これも地元の方々協力により実現しました。登山者に分かりやすい手作りパンフレットを作成し登山口に設置。本城山のぼりを作成し、ふれあいセンター、駐車場、道路入り口、頂上などに設置しました。各手作り案内看板の設置。イベント時と本城山のスポット紹介に新聞社の活用。本城山パン、本城山弁当の作成（イベント時のみ）。

2019年3月には関市で行われた地域活性化への取り組みを報告する「まちづくり講演会」にて、「里山自慢大会」をテーマに発表する機会があり、整備の紹介と地域住民の健康づくりに貢献して、地域外の人にも登ってよかったと思ってもらうことを最終目標で発表しました。有志も増え、気が付けば山の整備に協力してもらえる方も増えました。声をかければ15名は集まるようになり、木の伐採等に随時協力して頂いております。恒例の毎月登山も10名から20名の参加があり、2019年4月には令和を記念して頂上に桜を植樹しました。11月には関市文化財保護センターが募集した山、歴史、城跡好きの人が30名登られました。これらにより地元はもとより地区外からも登山者が増えてきました。2020年は4月に今ある八神ルートとは別に新しい大洞ルートを整備。危険な白滝（不動明王祀られる）までの保護整備。各要所の手作り看板の設置。曲輪の整備等実施。

本城山シール（３種）の作成。

５月に富野地区にはもう２つの城跡があったとあり、新たに志津野城、青之木城の掘り起こし、志津野城の登山ルート整備をして皆さんが登り易くなるようにさらに進めていきます。本城山と歴史背景が同じ時代の城跡で富野城跡巡り等を考えております。又、地元に伝わる伝説（一本杉、戸立岩伝説）を後世に残すために整備と告知立て看板の設置。さらに桜並木とホテルが出る小野川の散歩コースの整備をしていきます。

最終的には地元城跡マップ（パンフレット）、充実した案内看板を作成します。住民の皆様の熱い応援の元に更なる富野の歴史財産維持を継続し後世に残したいものです。

2018年	12月11日	本城山整備
	12月25日	本城山天国寺探索
2019年	2月17日	整備、休憩所ベンチ作成作成。展望場所整備
	3月21日	関市里山発表会（本城山の取り組み発表）
	4月 5日	登山口駐車場交渉、契約
	4月 6日	本城山登山（令和記念桜植樹）
	4月28日	本城山登山
	5月19日	本城山登山
	6月 5日	県立図書館県内城跡案内（本城山案内）
	6月 9日	本城山整備と登山。
	6月30日	美濃蔵地区のみなさんの訪問。
	6月14日	本城山登山
	9月 6日	ふれあいセンター内、本城山ふれあいカフェオープン
	10月25日	本城山のぼり作成し立てる。
	10月26日	文化祭でアピール。 地元大野さん作成の本城山ジオラマ展示。
	11月 9日	本城山整備
	11月17日	関市文化財保護センター30名登山
	11月30日	加治田城跡見学
2020年	12月 7日	城跡ツアー（25名中津川苗木城、恵那岩村城見学）
	12月 8日	本城山登山 本城山パン配付 14時より関市文化会館関市の城講演会。
	1月19日	本城山登山
	2月 6日	本城山整備 頂上付近の新しい曲輪の整備。
	2月23日	本城山登山
	2月24日	本城山登山新道探索
	2月28日	本城山登山 整備
	3月 9日	安土城、小谷城見学
	3月13日	本城山登山
	3月22日	本城山登山

4月12日	本城山登山、整備
4月19日	本城山登山
4月26日	本城山新道、大洞コース整備
4月28日	本城山大洞コース看板設置
5月4日	駐車場看板移動、草刈
5月5日	志津野城、青之木城探索
5月8日	本城山曲輪群草刈整備
5月11日	志津野城登山道整備
5月18日	猿啄城、武儀大洞城見学
5月21日	本城山登山
6月22日	本城山駐車場、登山口草刈

4月、5月はコロナウイルス感染予防のため、一般の方の月例登山は見合わせ。一部のみで活動。地区の方に年1回、本城山以外の城跡見学会を開催。今年3回目を迎えます。今後も本城山中心に地区活動をしてまいります。

(中島 亘)



史実と歴史小説のあいだ

中島真也（関市役所）

関高地研部の皆さん、こんにちは。昨年7月7日のフィールドワークに参加させていただいた（自称）作家です。

あの後、堂洞合戦を題材にした短編小説を書き、岐阜県文芸祭（県主催）に応募したところ、奇跡的にグランプリを受賞することができました。皆さんには感謝で胸がいっぱいです！

さて今回は、私が書く歴史小説について語ろうと思います。

ご存知のとおり、歴史小説とは史実を題材にしたフィクションです。そこで繰り広げられるストーリーは、ホントかウソかと聞かれたら「ウソ」になります。私も原稿を書いている途中に、ウソばかり並びたてて歴史研究家の方々から怒られないかなとふと思うことがあります。

しかし、世間では、ウソが史実とされていることってわりと多いのです。

例えば、日本人が皆好きな坂本龍馬——現代、ドラマなどでイメージされている龍馬像は、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」から生まれたものです。この小説は、見てきたかのようにウソを創り上げる達人とも評される司馬により書き上げられると、たちまち大ヒットとなりました。

が、実際のところの龍馬の姿はもっと謎に満ちているようです。それで、私たち作家の間では、龍馬は何をした人かと聞かれたら、薩長同盟でも大政奉還でもなく、「司馬遼太郎を儲けさせた人」と答えよというジョークがあります。

ほかにも、明智光秀は「敵は本能寺にあり」と言っていないとか、平家物語は軍記物なので小説と同じフィクションとか……たくさんあります。

では、なぜ人は作り話をホントと錯覚するのでしょうか？

私が思うに、それは単に面白いと感じるからではないでしょうか。史料を読解したり、年号を暗記したりすることよりも、その時代に生きた人間の生の姿を想像することは、何より人々の興味をそそります。確かに、竜馬のような颯爽とした青年が町を闊歩していればカッコよさそうだし、光秀の言葉は本能寺に向かう胸の内の的確に表していそうです。こういった創作物を読んでいるとワクワクが止まりません。

なので、私も歴史小説を描く際には、なるべく人々の興味をそそりそうなことに着目してストーリー（プロット）を組み立てます。今回書いた堂洞合戦の話もそうしていますので、興味のある方はご覧ください。なんと地元の富加町から依頼があり、町広報の令和2年6月号から1年にわたって連載されています。

それにしても、あの日皆さんに同行し、なんとなく書いた小説がここまで大きく取り上げられるとは思いませんでした。これはウソのようなホントの話です。

後 記

「岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第3号」発刊の運びとなった。今回は「中濃の戦国史」をテーマとし、本校生徒による論考、研究経緯（活動報告）、本校の活動と深く関わっていただいている外部の方々からの特別寄稿を編集した。以下に内容を紹介しておく。

（１）朝日大学戦国武将作文コンクール応募作品

昨年度、朝日大学戦国武将コンクールにおいて、本校生徒の石原伶緒さん、山内康誠さんが入選を果たした。最優秀賞を受賞した石原さんの作品は「東美濃攻略から見る織田信長」、優秀賞を受賞した山内さんの作品は「織田信長、語られない天下布武の第一歩」である。

彼らが夏休み中に作文を執筆する前、地域研究部は、富加町教育委員会の島田崇正さん、山内正明さんの案内で、織田信長の美濃攻略に関わる史跡踏査を行った。研究書や小説を読むだけではなく、実際に山城や古戦場をめぐり、地域の歴史について考え、さらには地域の歴史資源の活用について考えようとの試みである。島田さん、山内さんおふたりの名調子による歴史の追体験は、高校生のイメージーションや研究意欲をかき立てるに充分であった。

ふたりの論考ともに、信長の統一事業にとって、美濃攻略そしてこの中濃攻略がいかなる意味を持っていたのかがテーマである。ふたりはそれぞれの切り口から考察を加えた。石原さんは中濃地域の地政学的重要性を指摘し、山内さんは美濃・尾張双方の家臣団統制の問題に言及した。仮説の可否も含め、今後の探究に期待したい。

（２）「関市に残る明智伝説」

本校生徒による明智光秀探究は、関市役所と連携した企画により始まった。当初のテーマは関鍛冶と光秀の関わり。この話に限らず、県内各地に残る明智伝説の中に、史実として認定できるものが何ひとつないということがわかり、一時は気落ちしたが、その後は「江戸期の光秀伝説形成」にテーマを変更し、現在にいたっている。関市洞戸にも光秀伝説があったことは、史実とは言えない伝承とは言え驚きであった。このほかにも、「明智一族宮城家相伝系図書」に登場する関市神野・小瀬の地名、一級史料である土岐文書にあらわれる武気庄の地名など、明智氏と関市をつなぐわずかな手がかりを見出せたのは収穫であった。

本来、謀反人であったはずの光秀の伝説がなにゆえ美濃各地に形成されたのか。興味深いテーマである。今後もこのテーマに関する探究は、山内康誠さん、藤井大輝さん、小山政亮さんを中心に継続する予定であり、中間報告は関市役所の早川千景さん（本校卒業生）の全面的な支援を得て、「広報せき」（2020年3月号）に機会をいただいた。現在、関市立図書館での発表会も計画中である。

（３）研究経緯（活動報告）

本校公式ウェブサイト上で報告したフィールドワークの報告を再録した。フィールド

ドワークは、富野地域委員会、富加町教育委員会、関市企画広報課、関市観光協会などの関係機関の支援を得ながら進めた。地域研究部による郷土史研究活動には、自治体等の関係機関、地域の方々のご協力が必要不可欠である。我々の研究成果が、地域の歴史の解明や文化財の保全・活用に繋がればこの上ない喜びでもある。

（４）「歴史マンガで郷土史を発信 ～みのかも定住自立圏事業～」

富加町教育委員会文化財専門官の島田崇正さんより原稿をいただいた。島田さんは富加町内の発掘調査を含む文化財保全活動に従事されている。貴重な学術的成果を学界に発信する一方、本稿でも紹介されている漫画の活用にみられるような斬新なアイデアで普及活動を推進中である。

関高地域研究部のよき理解者であり、富加町内フィールドワークでは案内役を務めていただいた。この３月に富加町で実施予定のシンポジウムや、５月に共同発表する予定であった日本考古学協会ポスターセッションは、残念ながら感染症対応のため中止となったが、他日を期し実現に移す予定である。

（５）「小野山城の保全・活用 ～岐阜県関市富野地区～」

光秀探究の経緯で富野地区のフィールドワークを計画した我々は、富野地域委員会の川合治義さん、中島亘さんをはじめとする富野地区の皆様のお世話になった。川合さんは本校社会研究部（地域研究部の前身）の先輩にあたる。今回のフィールドワークでは、上大野神社をはじめ、富野地区では地域の方々によって文化財が大切に保全されていることがよくわかった。

富野地区では、「１６世紀中葉に本城山頂一帯に築かれた小野城の実態を解明して住民の共通認識とする」「歴史研究だけでなく本城山への登山客を誘致する」というふたつの目標を掲げ、登山道整備、藪の伐採、立て看板設置が鋭意進められている。地域の方々による文化財の保全・活用の好例をとして、今回の寄稿をお願いした次第である。

（６）「史実と小説のあいだ」

中島真也さん（本校卒業生）は、関市役所職員の勤務の傍ら、歴史を題材とした小説を執筆されている。昨年７月の富加フィールドワークにお誘いしたところ、快く参加してくださった。中島さんはこの時の知見をもとに、短編小説「堂洞の人質」を執筆し、昨年度の岐阜県文芸祭小説部門で文芸大賞を受賞された。今回は、史実に創作を交える小説執筆の苦悩や醍醐味について語っていただいた。

「堂洞の人質」は富加町広報誌で連載が予定されていると聞く。地道に文化財保全活動を続ける島田さんの熱意が、前掲の高校生による研究や中島さんの創作活動につながった。こうした輪を、今後も大きく広げていきたいものである。

末筆ながら執筆にご協力いただいた早川千景さん、島田崇正さん、川合治義さん、中島亘さん、中島真也さん、ご支援いただいた関係機関に心より感謝申し上げたい。

林 直樹 （地域研究部顧問）

岐阜県立関高等学校地域研究部報

告

第 3 号

発 行：令和 2 年 6 月 11 日

発行所：岐阜県立関高等学校

岐阜県関市桜ヶ丘 2-1-1

電話 0575-22-5688

FAX 0575-23-7089

岐阜県立関高等学校地域研究部